

5月号 こどもに寄り添う「受容と自立」のバランス

私たちスタッフが、こどもにとって「安心して頼れる大人」であるためには、「こどもの自主性を損なわない適切な関係性」を保つことが大切です。こどもを受け入れようとするあまり、つい甘やかしてしまうことがないよう、適切な距離感を保つためのポイントを確認してみましょう。

1. 友達ではなく、安心できる大人として接する

こどもと信頼関係を築き、「仲良くなること」はとても大切です。しかしそれは友達のような「なれなれしい関係」になることではありません。注意すべき場面であるにもかかわらず「嫌われたくない」という理由で見過ごしたり、必要な指導を避けて「楽しいこと」ばかりを優先したりすると、馴れ合いにつながる恐れがあります。親しく接しつつも、大人の役割としての境界線は崩さない意識を持ちましょう。

2. こどもの声を受け止めつつ、自立を促す

様々な課題や不安をもったこどもほど、すぐに答えを求めたり、特定のスタッフを独占しがったりする傾向があります。そうした時には、突き放すのではなく「まずは一緒に考えてみよう」「順番に話を聞いたら、少し待っていてね」などと声をかけ、一歩引いて見守ることも大切です。

3. 会場のルールを徹底する

「本当はダメだけれど、今日は特別にいいよ」などと、他のこどもに内緒で特別な扱いをすると、関係性の境界が曖昧になってしまいます。あらかじめスタッフ間で対応の基準を共有しておきましょう。判断に迷う場合は、指導員や他のスタッフに相談し、組織として一貫した支援を心がけることが大切です。

長い目で見ると、一時的な要求のすべてに応じる大人よりも、自分のことをきちんと見つめ、真剣に考えてくれる大人の方が信頼されるものです。こどもの気持ちを第一に考えながらも、会場のルールやスタッフとしての役割を理解し、常に一貫した姿勢で接するように心がけましょう。